

【日本の大学】第18回——金沢大学：地域と世界に門戸開く

金沢大学は、戦後の学制改革により1949年に設立された国立大学である。日本海に面した歴史のある城下町、石川県金沢市にあり、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を大学憲章に掲げている。



加賀百万石の城下町だけでなく、大学の源流は江戸時代にまでさかのぼることができる。医学系学部につながっているのが、江戸時代末期の1862年、創設された加賀藩彦三種痘所である。明治時代に入ると、1870年に、金沢医学館、製薬所、病院が開設され、それがのちの金沢医学校、金沢医科大学（1923年）へとつながり、さらに現在の金沢大学の医学類にまで引き継がれている。

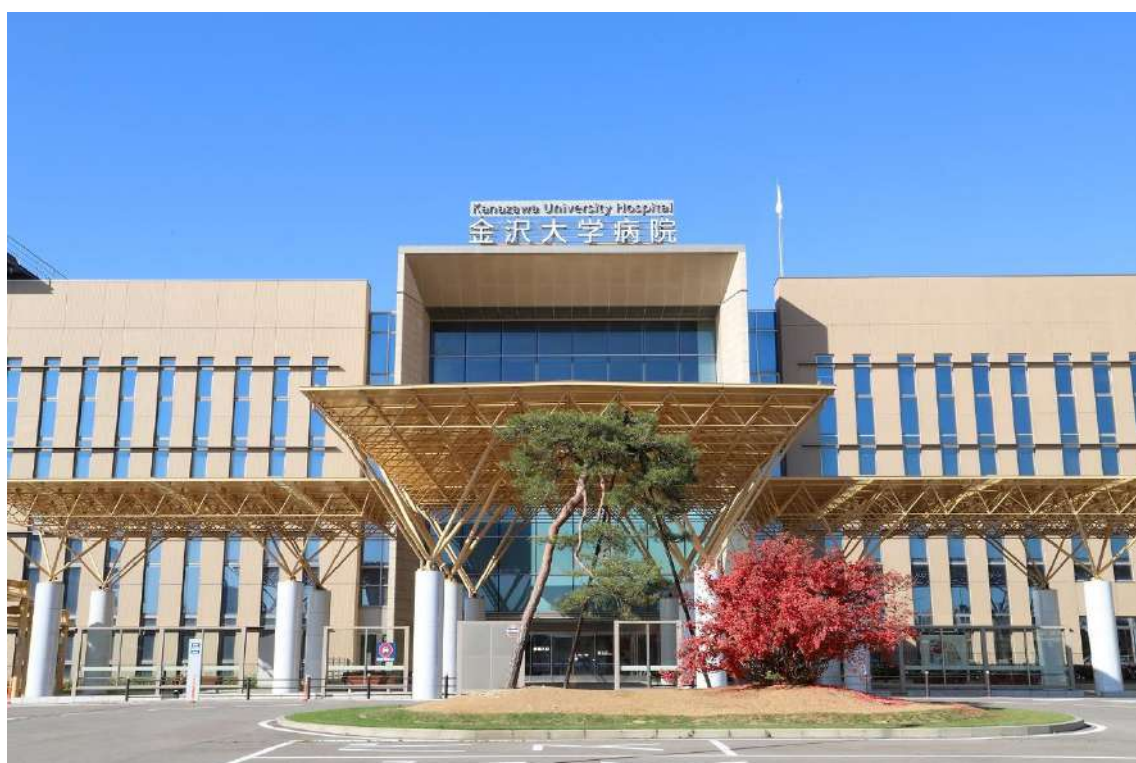
教育学部（現在は学校教育学類）の源となったのは、1874年に石川県が小学校教員を養成するために創設した集成学校である。同校はその後、県師範学校と改称され、のちに設置される金沢高等師範学校、石川青年師範学校とともに、地域の教育を支えていく。県女子師範学校も前身の一つだが、地方の女子師範としては日本で一番古い歴史を持つ。

お城の中の大学

1887年には、官立の第四高等中学が設置され、のちに第四高等学校と改称（1894年）さ

れる。同校はのちの文・法・経などの社会学系学部や工学部の前身である。第四高等中学の起源も古く、第11代加賀藩主前田治脩により1792年に設立された藩校の「明倫堂」までたどることができる。

これら各学校が、戦後統合されて総合大学として誕生したのが、金沢大学である。当初は、法文学部、教育学部、理学部、医学部、薬学部、工学部の6学部の体制でスタートした。このうち、法文、教育、理の3学部は、キャンパスが金沢の中心、金沢城郭内にあり、1989年以降に角間キャンパスへ移転するまで、全国的にも珍しい「お城の中の大学」として市民や観光客などに親しまれた。



以下、金沢大学のホームページなどから、大学の現状を探ってみよう。

1972年には医療技術短期大学部を設置し、のち96年に医学部の保健学科に改組されている。1980年には、法文学部を分離して、文学部、法学部、経済学部へ改組、全部で8学部の体制になった。

学域・学類に組織改正

2008年には、大規模な組織改正を実施した。8学部を、3学域・16学類に転換した。3学域は「人間社会学域」「理工学域」「医療保健学域」である。

このうち「人間社会学域」は人間とその社会が直面する 21 世紀の激変に立ち向かうため、「人間」と「社会」に関する知の世界を自由自在に探究する新しい学域である。同学域は 6 学類（人文、法、経、学校教育、地域創造、国際）に分けて、既存の学問領域を乗り越える自在な学び方を深く学修し、社会の諸問題に対処できる知力と行動力を鍛えるとしている。

「理工学域」は高度な創造力と技術力を備えて、社会に貢献できる科学陣を目指すもので、6 学類（数物科学、物質化学、機械工学、電子情報、環境デザイン、自然システム）からなる。爆発的に発展し分野融合が進んでいる領域に対応して、新たな価値の創造や技術革新を通じて、未来社会を牽引する人材を養成する。2018 年には、時代のニーズを取り入れて 6 学類を 7 学類に再編成した。現在は、数物科学類、物質科学類、機械工学類のほか、フロンティア工学類、電子情報通信学類、地球社会基盤学類、生命理工学類の 7 学類となっている。



例えば、フロンティア工学類では、技術革新が急速に進む現代社会に対応して、未来社会を切り拓いていく能力を身につけることを目指し、従来の工学の専門分野である電子機械、機械、化学工学、電子情報に対応するコア・プログラムを学んだのちに、先進的な六つのフロンティア・プログラムを選択して従来の工学の枠を超えた未踏領域（フロンティア）を開拓する素養を身につけようとしている。

「医療保健学域」は4学類（医学、薬学、創薬科学、保健学）に分類された。最先端の知識と技術を身につけ、温かみのある医療人を育てる。患者本位の全人的医療に貢献できる医・薬・保健の専門職業人を育成することを目指していく。

学域学類制では、最終的な専門（主専攻）を入学した後に決定できる経過選択制と、幅広い学習機会が得られる副選択制を活用して、学生たちが自身の目的に沿った形で、自由に学びを享受できるように配慮しているのが大きな特徴である。従来の学部学科では特定の学問を追究するという縦割り色が強く、学部学科単位の授業に固定され、他の学術分野に興味があっても履修が制限されがちだが、この学域学類制では「境界領域を含んだ広い分野の学問の履修が可能になる」としている。

また、2016年からは国際基幹教育院を新たに開設した。さらに、入学後に幅広い学問分野に触れて体験し、理解を深めながら専門分野を選択できる制度も用意されている。



積極的に大学改革

入試改革にも取り組んでおり、2018年度入試からは一括入試を採用、入学後、大学の中で学びながら1年間かけて、自分が進む学類もしくは専攻の選択を可能とする仕組みを設けている。

さらに「大学で学んだ専門分野をもっと深めたい」「研究者を目指したい」という学問探究への意欲あふれる学生や、「法曹を目指したい」という学生には大学院への道も開かれている。七つの研究科（修士・博士、教職大学院や法科大学院）が設置されている。



現在の学長は第 11 代の山崎光悦氏である。金沢大学工学部卒、大学院工学研究科を修了して金沢大学に勤め、教授から副学長を経て 2014 年に学長に就任した。専門は機械工学で材料力学・設計工学を中心とした研究を行っており、日本の最適化研究の草分け的存在と言われる。



金沢大学学位記・修了証書授与式（中央：山崎光悦学長）

学長就任以来、大学改革のエンジンとなる基本戦略「YAMAZAKI プラン 2014」を策定し、以降2度にわたってこのプランの見直しを行ってきた。これまでに、年俸制やリサーチプロフェッサー制度、教員評価制度など先導的な人事給与制度の構築・運用、新学術創成研究機構や国際基幹教育院、新学術創成研究科などの新たな教育研究組織の創設、ナノ生命科学研究所の創設などの改革を実行してきた。

さらに、20年の6月には「YAMAZAKI プラン 2020」を策定し、自主的かつ自律的な大学改革に取り組んでいる。大学が環日本海域に立地する世界卓越型大学を目指す国立大学として「多様な価値観を持つ多様な人材が集まり、新たな価値が創造される場」となることを目標として提示し、中長期的な視点から大学のあるべき姿を提言している。

教職員数は2842名（うち教育研究職員1323名）、学生数は10146名（学部7799名、大学院修士・博士課程2253名など）外国人留学生も600人余り受け入れている。（以上2020年5月現在）



金沢大学の留学生たち

金沢大学では、前身である第四高等学校（第四高等中学校）に学んだ日本を代表する哲学者・思想家である鈴木大拙と西田幾多郎を記念した国際賞を 2017 年に設けた。哲学・思想・宗教を中心とする分野で、国際的に卓越した業績を挙げた研究者を顕彰するのが目的で、既に第 1 回（2018 年）と第 2 回（2019 年）の受賞者を出しており、現在、第 3 回の対象者を募集中である。

地域との連携、社会貢献にも力を入れている。石川県、金沢市を始め、13 の自治体と連携協定を締結しており、大学の人材や知的財産を地域の活性化や課題の解決に生かすとしている。

一つの例が、「能登里山里海マイスター」の育成事業。県や、奥能登 2 市や地元企業と連携して能登の明日を担う若世代を対象にした制度で、里山里海 of 自然資源を活かして能登半島の活性化を目指す取り組みだ。これまでに 165 人のマイスターを輩出しているという。

日文：滝川 進
写真：金沢大学 Facebook